

音楽聴(Musikhören)の概念を生かした音楽鑑賞教育の研究

教科・領域教育学専攻

芸術系コース〈音楽〉

M08196H

石原孝一

1. 動機と目的

本研究は、「音楽に何を聴くか」「音楽をどう聴くか」という音楽鑑賞教育の問題の解決のために、〈音楽聴〉(Musikhören)の概念を生かした音楽鑑賞教育の研究を行い、〈音楽聴〉の概念を生かした音楽鑑賞の授業を提案することを目的とするものである。

鑑賞とは、マーセル(J.L.Murcell)が「音楽への動機付けの源泉であり、音楽教育の目的は、よりよい、より深い鑑賞によって達成しうる。」と述べているように、音楽学習の中核であり、音楽科教育においてきわめて重要な活動といえる。その鑑賞が学校現場で停滞し、中教審の報告において「鑑賞が不十分」との指摘を受けている。その原因は、「音楽の何を聴かせればいいのか分からない」、「音楽をどう聴かせればいいのか分からない」という、鑑賞教育の難しさにある。このような状況を打破するため、音楽鑑賞教育に〈音楽聴〉の概念を生かすことが有効ではないかと考えた。

〈音楽聴〉とは、ドイツの音楽学者リーマン(H.Riemann)が提唱したもので、「音楽の理解に基づいた、精神の働きによる能動的、創造的な音楽の聴き方」という「音楽の聴き方」の概念である。国安は〈音楽聴〉について、「感動を引き起こす音楽の秘密が、音楽の構造を理解することにより解き明かされ、音楽をより深く聴くことができる」と述べている。

そこで、本論では、「音楽に何を聴く」、「音楽をどう聴くか」という音楽鑑賞教育の問題の解決のために、〈音楽聴〉の概念を生かした音楽鑑賞教育の研究を行う。

2. 論文構成

はじめに

第1章 音楽聴の概念

第1節 ハンスリックの美的享受論

第2節 聴体験の構造

第3節 音楽聴

第4節 音楽の理解

第2章 音楽鑑賞における音楽聴の有効性

第1節 現代の聴体験における問題点

第2節 現代の聴体験における

音楽聴の有効性

第3節 音楽鑑賞教育の問題点と

音楽聴の有効性

第4節 これからの音楽鑑賞教育に

おける音楽聴の有効性

第3章 音楽聴の概念を生かした

鑑賞授業の構想

第1節 音楽に何を聴くか

第2節 音楽をどう聴くか

第3節 鑑賞授業の構想

第4章 授業の実践と検証

第1節 授業実施の概要

第2節 鑑賞教材について

第3節 学習指導案

第4節 授業の検証

おわりに

3. 論文の概要

第1章では〈音楽聴〉の概念について明らかにした。

最初に〈音楽聴〉の先駆的見解がみられる、ハンスリックの美的享受論についてまとめた。次に聴体験についてその深化の系列を構造化した、国安洋の「聴体験の構造」についてまとめた。さらに、〈音楽聴〉について、リーマンの見解を小林秀雄の見解との比較を通して考察し、リーマン以降の学者の見解も考察する中から、音楽聴の特徴を明らかにした。そして、〈音楽聴〉にとって重要な「音楽の理解」についてまとめ、最後に〈音楽聴〉の概念を次のように定義した。

〈音楽聴〉とは・・・、
「(構造の)理解に基づいた、精神(想像力)の働きによる、能動的・創造的な音楽の聴き方」

第2章では、音楽鑑賞教育における〈音楽聴〉の有効性について明らかにした。

最初に現代の聴体験における問題点として、木間英子の論をもとに、「肝心な耳が閉じている」こと、「1つしか耳をもっていない」ということを明らかにし、現代の聴体験における〈音楽聴〉の有効性についてまとめた。その中から、〈音楽聴〉は芸術音楽だけではなく現代の様々な音楽に対応できる聴き方であり、〈音楽聴〉の聴き方を学ぶことにより、多様な聴き方のできる「柔軟で弾力性のある開かれた耳」を育成できることを明らかにした。

次に音楽鑑賞教育における問題点と〈音楽聴〉の有効性について、児童のアンケートや鑑賞の授業実践事例などをもとに考察し、音楽鑑賞教

育においても〈音楽聴〉が有効であることを明らかにした。最後に、これからの音楽鑑賞教育における〈音楽聴〉の有効性を新学習指導要領との関連から探った。その結果、新学習指導要領の内容と、〈音楽聴〉の概念に共通点が多くあることを確認し、これからの音楽鑑賞教育における〈音楽聴〉の有効性が明らかになった。

第3章では、〈音楽聴〉の概念を生かした鑑賞授業の構想を示した。

最初に音楽鑑賞教育の重要なポイントである「音楽に何を聴くか」、「音楽をどう聴くか」について〈音楽聴〉の視点からまとめた。「音楽に何を聴くか」については、「構造を聴く」こと、そして、「構造の中から(創始者のリアリティー)を洞察する」ことを挙げて考察した。次に、「音楽をどう聴くか」については、「想像力で聴く」、そして「理解に基づいて聴く」ことを挙げて考察した。最後に、研究の成果を生かした鑑賞授業の構想図を示した。

第4章では、鑑賞の授業実践と検証を行った。

最初に授業実施の概要を述べ、次に、鑑賞教材であるヴィヴァルディ作曲の『四季』についての文献研究及び楽曲分析を行い、授業の要点を抽出した。そして、学習指導案を示し、授業の検証を行った。

4. 今後の課題

今後の課題として、①〈音楽聴〉の概念についてより深く掘り下げること、②教材として西洋音楽だけでなく、日本伝統音楽や諸外国の音楽を取り入れた授業づくりを行うこと、③実践が高学年のみであったので低・中学年にも実践を広げること、の3点を挙げた。

主任指導教員 草野次郎